

源氏鶏太集

現代の文学

30

現代の文学 = 30

源氏鶏太集



御身
停年退職

河出書房新社

現代の文学 30 源氏鶏太集

© 1964

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和 39 年 7 月 1 日 初版印刷
昭和 39 年 7 月 5 日 初版発行

定価 390円

著 者 源 氏 鶏 太
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 高 橋 武 夫
装 幀 原 弘(N.D.C)

印 刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本・加藤製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

御身……………三

停年退職……………一九

年譜……………五九

解説……………小松伸六…五七

挿画 森田元子
写真 三木 淳

源氏鶏太集

御

身

第一章 三十万円

一

目を覚ましたとき、自分がどこにいるのかわからず、ちよつととまどってしまった。いつもの自分の部屋でないことだけは、たしかなのである。しかし、すぐにホテルなのだ、と気がついた。ホテルのダブルベッドの上なのだ。ああ、とかなかな溜息を洩らして、

(とうとう、外泊してしまったのだ！)

まず、弟に何んと弁解したものであらうかと思わずらった。

長谷川は、向こうむきになって、おだやかな満ち足りたような寝息を立てていた。私は、その背中にしがみつき、顔を埋めるようにして寝ていたのだ。自分でも思いがけぬ姿勢であった。そのことが、自分の長谷川への偽

らぬ感情を現わしているようだった。思えば、こんな筈ではなかったのだし、あくまで「事務的」で通すつもりであったのだ。

(しかし、今日で、何も彼も終りになるんだわ)

しかし、まさしくその日を迎えた私の気持ちは、そのことを喜んでいないのであった。寧ろ、悲しんでいる……。そういう自分を、私は、憎みたくなっていた。

長谷川が目を覚まさないうちに、私は、そうつとベッドから降りた。スリッパが冷やりとする。まだ、六時過ぎたばかりであった。渋谷の高台にあるこのホテル全体が、ひっそりと寝静まっているようであった。

テーブルの上には、昨夜飲んだビール瓶とか食べ残した物をのせた皿などがおいてあった。きたならしいだけだ。それらを音のしないように片づけておいて、すこしカーテンを開いて見た。

五月の朝空は、爽やかに晴れ上っていた。目黒一帯の家々が、窓の下の方にひろがっていた。しかし、どの家もまだ眠っているようであった。じいっと、それを見ているうちに、何かやるせない思いがひたひたと押し寄せてくるようだ。

うしろで動く気配がした。振り向くと、長谷川が寝返りを打ったのである。何か口の中でいっていたようだが、そのまま静かになってしまった。たしか、四十歳な

のである。決して、美男子ではないが、憎めない顔をしていた。不潔でもなかった。

（もし、あたしのこういうことが、和氣さんに知れたら？）

私は、身ぶるいを感じた。長谷川とこういう関係になるとき、私は、和氣年久をあきらめようと決心した筈なのである。その決心は、今でも変わらない。しかし、知られることは嫌だった。死んでも嫌だ、と思っている。軽蔑されるに違いないであろうから。私は、だれに軽蔑されようともかまわないが、和氣年久にだけは、軽蔑されたくないかった。虫がいいとはわかつている。

私は、風呂場へ行つて、昨夜の湯を捨てて、新しい湯と入れかえた。長谷川は、その音にも目覚めぬようであった。私は、一人で浴槽に身体を沈めた。

（二十四歳のあたし……）

私は、自分の身体を他人のような目で、ジロジロと眺めまわしていた。長谷川は、いい身体をしているな、とほめてくれた。だからといって、乱暴に扱ったりはしなかった。やさしく、いたれり、つくせり、であった。とはいふものの、私は、長谷川以外の男を知らないのである。和氣なら、どのように扱ってくれるであろうかということは、秘かに想ってみたことがあるけれども。長谷川の愛撫を受けているときにそういう空想をして、二

重の喜びを味わったことがないとはいいい切れないのである。

私は、石鹼をたっぷり使つて、身体のすみずみまでも洗った。胸底から何かが込み上げて来て、目頭が熱くなつて来た。

（ああ、泣くんだわ）

私は、涙の流れるにまかせておいた。自分ながら感傷的になっているとわかつていた。こんなことは、はじめなのである。今頃になって、こういう感傷に襲われようとは、思ってもみないことだった。だけど、それはそれで、悪くなかった。涙の玉は、石鹼の泡の中に、次々に吸い込まれていった。

泣いたことで、私は、却つて、気持ちがさっぱりできた。部屋へ戻ると、長谷川は、まだいい気持ちそうに寝ていた。私は、鏡台の前に腰を掛けた。鏡にうつった自分の顔をしばらく見つめていてから頭髮の手入れにかかった。

「何んだ、もう起きていたのか」

うしろから長谷川がいった。私は、鏡の中の長谷川の寝呆け顔に、

「はい、そして、お風呂へも入ってしまいました」

「いっしょに入ろうと思つていたのに」

「残念でした」

「今、何時？」

「七時に十分前です」

「あと、三十分寝かしてくれないか」

「どうぞ」

「その間に帰ったりしたら承知しないぞ」

「どうしてですか？」

「話があるんだ」

「話って？」

「あとで言う」

そういうと、長谷川は、目を閉じた。

私は、鏡台の前をはなれると、洋服に着換えた。そのあと、窓際の椅子に腰を下ろして、外の風景を眺めながら煙草に火を点けた。吸うのではなくて、ただ吹かすだけなのである。しかし、これだって、長谷川を知るようになってからであり、長谷川以外の人の前では避けるようにしていた。

二

「お姉ちゃん、大変なことになったんだ」

弟が真っ青になって私にいったのは、半年前であった。

私は、虎の門のK商事会社に勤めていた。弟は、浅草のM玩具製造会社に勤めていた。弟は、二十二歳で、高校を卒業すると、そこへ勤めるようになっていたのであ

る。

その日の昼すこし前に、弟から電話がかかって来て、「大至急に相談したいことが出来たんだ」

と、おろおろ声でいった。

で、私たちは、私の会社の近くの喫茶店で落ち合ったのであった。私は、弟の相談というのは、どういうことか見当がつかず、しかし、どんな相談にでも乗ってやらねばならぬ、と思っていった。何故なら、私たちは、二人っきりの姉弟であり、両親がなかったのである。私が今まで結婚しないでいた一つの原因になっていたかも知れない。

「大変なことって？」

「お金を落してしまったんだ」

「まア、いくらよ」

「三十万円」

「三十万円！」

私たちにとって、それは目のくらむような大金であった。私の月給は、一万二千円。弟の月給は、一万円。合計二万二千円で、私たちは、六畳一間のアパートでつましく暮して来たのだ。その中からいくらかでも貯金しておこうと努めて、やっと二万五千円をためたやさきなのである。

「いったい、どうしてそんな大金を落したりしたのよ」

私は、思わず叱りつけるようにいつてしまった。弟は、脅えたようにうなだれ、周囲の人がこっちを見たくらいであった。しかし、私は、そんなことにかまっていられないような切羽詰まった気持ちで、

「会社のお金？」

と、更に、たたみかけるようにいつた。

「違うんだよ」

「では、どういうお金よ」

「課長の」

「まア、課長さんの？」

私は、ますます困ったことになった、と思った。勿論、会社の金であっても困る。しかし、会社の金の場合には、大いに叱られても、そこに情状を酌量して貰える余地がありそうだ。が、他人の、まして、課長の金とあれば、早急に弁償しなければならぬだろう。また、それが当然のことなのである。私は、目の前が真っ暗になるような気がした。もうどうしていいかわからなくなってくる。

「今日、いつものように得意先へまわることになって、課長がついでに投資信託を証券会社で売って来てくれといつたんだ」

「……………」

「浅草のA証券で売った代金が、三十万二千八百五十円

だったんだ」

「……………」

「それを袋に入れて貰って、たしかに洋服の内ポケットにしまっておいた筈なのに、日本橋のデパートの前まで来て、なくなっていることに気がついたんだ」

「……………」

「もしかしたら、さっきの証券会社に忘れたのではないかと、思って、タクシーで引っ返してみただけ……」

「なかったの？」

弟はうなずいた。

「課長さんは、どうしてあなたなんか、そんなことを頼んだんでしょね」

「僕は、割合に信用されていたんだ」

「信用されていたのなら、なおさら用心していなくっちゃダメじゃありませんか」

「ねえ、どうしよう？」

「どうしようって、課長さんには、まだいつてないんですよ？」

「いえるもんか、どんなに叱られるかわからないよ」

「叱られるだけですまないわよ。弁償しなくちゃア」

「弁償？」

「当然でしょう？」

「出来る？」

「出来っこないわよ。月に三千円ずつ返していったとしても八年以上かかるわ。それだって、課長さんがそういうことで、うんとおっしゃったらのことよ」

「その三十万円は、課長のお嬢さんの結婚のための費用にあてるつもりだったらしいんだ」

「まア、お嬢さんの結婚？」

とすれば、ますます早急に返済しなければならなくなる。私は、まだ見たこともない課長の娘の花嫁姿を頭の中に描いた。その人のためにも、三十万円の工面を何んとかしなければならぬのである。

「これから会社へ戻って、課長さんに正直におっしゃい。そして、どうか、一週間だけ、ご猶予を下さい、と」

「一週間？」

「その間に、姉が何んとか工面してお返しいたします、といっていましたというのよ」

「お姉ちゃんに、アテがあるの？」

「あるもんですか。まるで、ないわよ」

私は、もう腹が立ってたまらなかった。しかし、すっかり意気銷沈してしまっている弟を見ると、これ以上、叱るわけにはいかないのである。却って、哀れさが感じられてくる。とにかく、たった二人の肉親なのだ。

私は、その日のうちに、東京にある二軒の親戚へまわった。しかし、問題にされなかった。一万円でもといっ

たのだが、冷淡にことわられてしまった。ぐったりと疲れてアパートへ戻ると、弟は、食事もしないで待っていた。

「課長さんにいったの？」

「とっても叱られたよ」

「当然だわね」

「一週間以内に返して貰わないと、娘の結婚式が出来ないことになってしまうんだ、と」

「そう」

私は、途方に暮れるばかりであった。泣き出したいくらいであった。しかし、私が泣けば、弟だって泣き出すに違いないのである。もともと、気の弱い弟なのだ。すでに、目頭を濡らしているようだ。二人いっしょに泣いたところで、三十万円の工面が出来るわけのものではないのだ。

その夜、私たちは、いつものように蒲団を並べて寝た。弟は、しょっちゅう寝返りを打っていた。私は、大きな目を開いて、天井を睨みつけていた。無性に腹が立つてくるのである。勿論、弟に対してでも、課長に対してでもない。いつてみれば、三十万円という大金に対してであつたらうか。

私は、自分の会社で、金の貸してくれそんな人がいなかと探してみた。しかし、一万円や二万円ならともか

く、三十万円となると、あきられるか、一笑に付されるだけであろう。

（世間には、三十万円なんか、どうでもいいと思つてい人だつてあるに違ひないのに）

そして、私が、そのあと、閃めくように思つたのは、（誰かが私を三十万円で買つてくれないだろうか）と、いうことであつた。

しかし、すぐにそれこそ正気の沙汰ではないと打ち消した。第一、それでは、私を愛してくれているらしい和気年久に対して、申し訳ないということになる。そして、私だつて、和気が好きなのである。好きというよりも、愛しているといった方が當つていたろうか……。

和気年久は、私と同じ会社に勤めている青年だつた。まだ、独身で、二十九歳である。そして、一人でいるときは、いつでも何かを静かに考へているようなのである。勿論、同僚といつしよのときは、冗談もいふし、明るい笑顔でいる。私が和気に惹かれるようになったのは、屋の休憩時間に屋上で、人々からはなれてたつた一人で、外を見つめている横顔を見たときからであつた。その横顔には、何んといつたらいいのか、一種の精神的なものを感ぜさせられたのである。ただ精神的といつただけでは、説明不足である。孤独、といつたがいいのか、それとも、憂愁、といつたがいいのか。その目は、外を見て

いるようで、その実、心の深味を覗いているようであつた。その心の深味に、いいたい何があるのだろうか。

そのうちに、和気は、私の視線に気づいたらしく、こつちを見た。私は、あかくなつた。が、和気の方が私以上にあかくなつた。同時に、孤独も憂愁も消え失せていた。そのあとに微笑が漂いはじめた。

（もし、あたしで出来ることならどんなことでもしてあげたいわ）

私は、咄嗟にそんなことを思つてしまつたのである。頭から和気の胸の底に悲しみが潜んでいるものときめてかかつていた。思えば、おかしいことであつたが、自分では、おかしくなかつた。

私は、和気のそばへ行き、彼と並んだ。和気は、黙つていた。私も黙つていた。それでいて、私は、満ち足りた思いでいられた。そして、和気も同じ思いでいるに違ひないと信じていた。私のうぬ惚れであつたかも知れない。しかし、私は、自分が横にいるだけで、和気の気持ちと和らぐのであつたら、いつでもそばにいてやりたいような気持ちにさえなつていたのである。

午後一時になった。事務室へ戻らなければならぬ。「有りがとう」

和気がいった。私は、おどろいたように和気を見た。和気は、見返して、

「有りがとう」

と、もう一度、同じ言葉を繰り返してから、エレベーターの方へ歩いて行った。

そのうしろ姿を見送りながら、

（和気さんは、あたしの気持ちがあわかってくれたんだわ）

と、私は、もう有頂天にならなくなっていた。

一週間目に、私たちは、映画に行った。和気は、よいなことをいわないで、私の喋りまくるのを、聞いていてくれた。途中で、それに気がついて、

「あたし、お喋りでしょう？」

と、てれたようにいうと、

「もっと、喋ってくれたっていいんだよ」

その一言で、私は、ますます和気に惹かれるようになった。そして、そのときの別れぎわにも、

「有りがとう」

と和気がいった。

そうなると、私は、いよいよ和気のためにつくしてやりたくなる。もし、和気が欲しいといったら、私のすべてをあたえてもいいとさえ思いはじめていた。そのくせ、私は、和気との結婚をすこしも考えていなかった。その次の映画に行ったとき、私は、自分から和気に接吻を求めてしまったのである。

和気は、とまどっていたようであった。私は、羞しくなった。すべては、自分の一人よがりであったのかと引っ込みがつかなくなりかけていた。

「お願い……」

私は、目を閉じた。やがて、和気の唇が私のそれをおった。一度目は、軽く終った。私は、物足りなかった。が、二度目の接吻は、十分に熱情的であった。

和気には母親がなかった。そのことで、和気は、私の中に母親的なものを求めているのではないか、と思った。しかし、それこそ、私の最も望むところであったかも……。

三

そういう和気との関係が三か月も続いたとき、弟が三十万円をなくして来たのである。

しかし、私は、和気にだけは相談しまい、と思っていた。相談したところで、どうにもなるものでないことは明白なのである。却って、心配をかけるだけだ。

といって、あと一週間のうちに、どうして三十万円も的大金を工面すればいいのであろうか。それを思うと、気も狂いそうになってくる。しかし、私の横で寝ている弟は、私以上に苦しんでいるに違いないのである。

それでも、私は、いつか眠ったらいいのだ。が、夜中

に異常な気配を感じて、ハッと目を醒ますと、弟の蒲団が空になっていた。私は、あわてて起き上った。弟は、流し場にいた。そして、私に見られたのを知って、あわてて何かを背中に隠した。

「どうしたのよ」

私は、鋭くいった。

「ナ、何んでもないんだよ」

「何を隠したの？」

弟は、唇を噛みしめているだけだった。私は、立って行って、弟が背中に隠している物を見た。庖丁であった。

私は、背筋に冷水を浴びたようにぞうっとした。

「この庖丁で、何をするつもりだったの？」

「……………」

「ねえ、叱らないからおっしゃいよ」

「死んでやるつもりだったんだ」

「死ぬ？」

私は、わざとあきれたように、

「たかが、三十万円ぐらいのために死ぬの？ あんたの

いのちって、そんなに安っぽいの？」

「だって、僕は、口惜しかったんだ」

「口惜しい？」

「課長の奴め、僕が落したといっても信用しないんだ。

みんなの前で、僕が隠しているようにいうんだ。泥棒の

ようにいうんだ」

「そんなひどいことを？」

「だから、僕は、死んで無実のあかしを立てたかったんだ」

そういうと、弟は、声を上げて、泣きはじめた。余っ程、口惜しかったのであろう。しかし、それだって自業自得なのである。それにしても、人々の前で泥棒呼ばわりはひどすぎる。姉として、どうして放っておかれようか。これを放っておいたら地下の父も母も、きっと腑甲斐のない姉、というだろう。この瞬間、私は、

（あたしの身体を、誰かに三十万円買って貰おう）

と、決心した。

和気には悪いけど、今は、そういうことをいつてられる場合ではない。和気には、母親代りになってやれる女は、いくらでもいるだろう。現に、会社の杉山洋子が和気を好きなのうだ。しかし、弟にとっては、姉は、私一人なのである。私とその面倒を見てやらなかったら、誰も見てやらないのだ。私は、このときほど、血のつながりを強く感じたことはなかった。恐いくらいであった。

「利夫ちゃん。もう心配しなくてもいいわ。あたし、一週間以内に、きつと三十万円をつくって来て上げるから」

そういいながら、私は、目頭を濡らしていた。アパー

トは、物音一つせず、悲しいほど静かであった。

翌日、私は、京橋にあるバー「K」を訪ねた。地下室にあって、上品な店であった。さして広くはないのだが、客筋は、上等のように聞いている。そのバーは、私のクラス・メイト浅野明子の姉がマダムなのである。いつか、同窓会の帰りに明子に連れられて行った。マダムは、私の顔を覗き込むようにして、

「いつでも、気楽に遊びにいらっしゃいな」と、いつてくれたのである。

私は、その後、一度も行っていなかった。行ってみたことも思わなかったのである。しかし、私が、自分の身体を三十万円で、と思ったときには、そのマダムの顔を思い浮かべていたのである。しんけんになって頼めば、何とか相談に乗って貰えそうな気がしていたのである。恥かしいなんか、もういつていられたなかった。ただし、私に三十万円の価値があるのかどうか。そして、果して、そういう男がいるのかどうか、見当がつかなかった。

私がそのバーへ入って行くと、時間が早かったせいか、マダムは、まだ来ていなかった。客も、カウンターに一人と、隅の方の席に二人組がいるだけであった。女たちは、その二人組の周囲に集まり、カウンターの男は、ウイスキーを飲みながらダイスをしていた。私は、カウンターに近づいて行き、バーテンダーに、

「マダムさんは、まだでしょうか」

ダイスをしている男は、ちらっと私を見たが、すぐ視線を戻した。バーテンダーは、時計を見て、

「あと、十分もしたらくると思いますが」

「ここで、待たして頂いてもいいでしょうか」

「どうぞ」

私は、カウンターの隅の方に寄った。ここまでは来たものの、無性に肩身がせまくなってくる。

「何か、お飲みになりますか」

バーテンダーがいった。私は、頭を横に振った。ダイスをしている男は、もう私には無関心であった。私には、その方が気楽であった。隅の方の客は、ときどき、女たちを笑わせていた。

十五分ほどして、マダムが姿を現わした。バーテンダーが、

「マダム、さつきからこのお方が」

と、私の方を見た。

マダムは、私を覚えていて、

「まア、矢沢さん。よくいらしたわ」

と、好意のこもった笑顔でいった。

四

マダムは、私の話を本気になって聞いてくれた。

